

倭訓栞後編

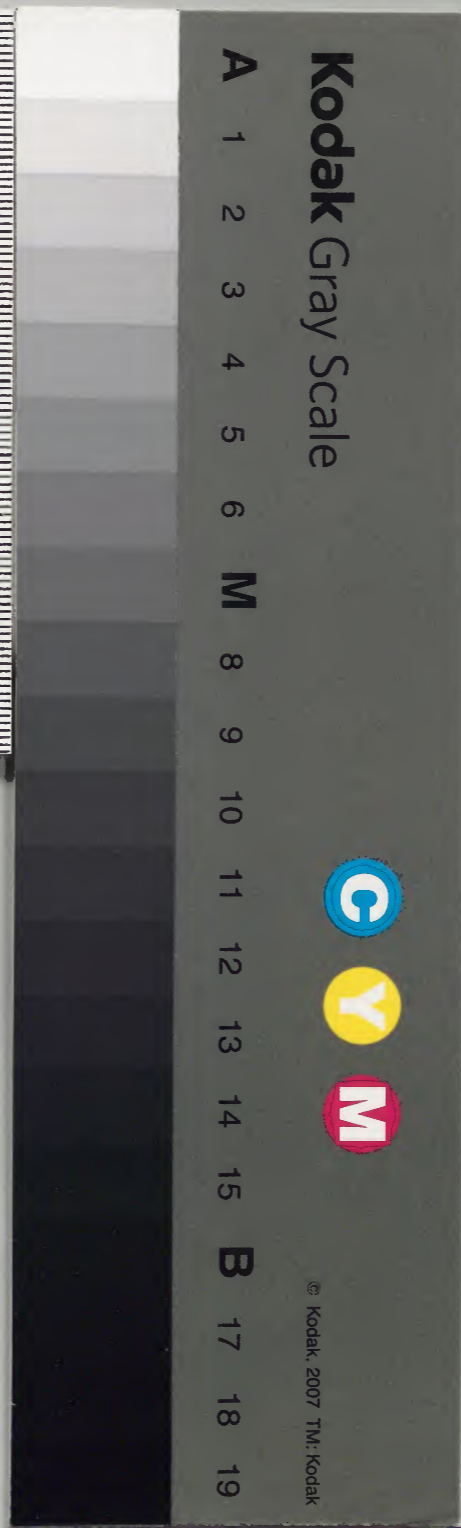
多之部

土

|      |    |   |   |
|------|----|---|---|
| 和書門  |    |   |   |
| 二一六五 | 八〇 | 二 | 八 |
| 一號   | 函  | 架 | 冊 |

|      |    |    |
|------|----|----|
| 內閣文庫 |    | 和書 |
| 二一六五 | 八〇 | 二  |
| 一號   | 冊  | 架  |

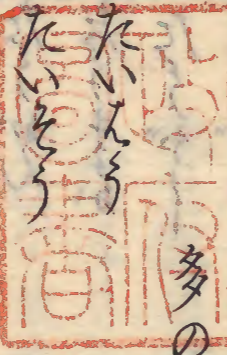
|      |         |
|------|---------|
| 內閣文庫 |         |
| 番號   | 和 21651 |
| 冊數   | 82 (75) |
| 函號   | 263 10  |





倭訓栞後編卷之十一

洞津 谷川士清纂



多の部

たいんろ

帶方とけり會稽郡の名今の八關也

たいそ

大造の音也又大相の音ともなり

たいく

橙とりふ帯ふ臺ふろ有とめて名づくともどその

實あつらみく後も落ぶる来年多ある時まで青くよて田

青橙の名あり四五年と落ぶるなりはれ代々とも之義あり

べー春盤小用ふもさる其意也○源氏たゞくきと云

ハ大くき義大事といふ也とくろくろ物語みもくを

たいふ 狼芽也大根菜の義也

たいさぎ 鷺の形大也白鶴子也とくろ

たいまい 和名抄く瑤瑁ハ代味ニ音とんえうり

たいとド 東涯云民間以中元日設盂蘭盆會其明薄暮人



出水傍燃炬称送靈魂士女雜沓洛四方山面燃火或為大字或為  
妙法等字又為舩狀皆就山面平處隨字勢屈曲掘大坑數十中積  
薪柴或逐字植株末束置薪柴皆一時火之宛成物狀食頃而滅  
たいことぐん 始て皇極紀する魏志の注く至明帝時始起太

極殿とあり

△たうさ

礬水と云ふ地ともんる今膠礬たどとて造  
り成りたうさ紙と云ふ本草に礬水と云ふ米氏十紙説の  
云礬とはちべり○洙色したうさ入るといふ明礬と云ふだ  
うすくもとる

たうざん

鵝の俗名唐雁の音也蒼白二色あり

たうまふ

鷓鴣也庭鳥の大あると云ふ今人の八鷓鴣

たうざい

大唐米ともいふ私也と云ふは乾の義とや

たうざう

番椒也秀吉公朝鮮征伐の時種を得たりよて高  
麗胡椒と云ふ貝原氏説也色く黄赤ありて百餘品く及べり出

羽と云ふ一參遠總く南蛮西國仙臺く胡椒と云ふ東國く真の  
胡椒と云ふのこせと云ふ味甘き一種あり○山唐がくハ列當  
也と云ふ猿錫杖ともいふ

たうさうど

乾飯と呼ハ河内國道明寺より製し出と者と精

品と云ふ故也尼寺く昔神の伯母尼公と開祖と志氣郡道明も  
村ふあり一名土師村○と云ふハ河内の觀心寺く是もを  
晒の粉と製す弘法佛法僧鳥の詩あり一處也○道明寺く昔公立  
寄りし時の款也

鳴と云ふ別と云ふをけりるのやうな里は曉と云ふ

たうらうん

今にあり邑人雞と畜ふ事公忌と云ふ

たうらう

道灌草の義とや郷藥本草に長鼓草と云ふ

△たぶ

万葉集に云ふ倭名抄く鶺鴒と云ふ新撰字鏡小鳥

と云ふ鴨の類と云ふ尾長とも云或ハ鶺鴒鳥也と云ふ古俗より



勳とよみり伊勢神宮邊にて小ぶとま侍中群要日次御贄り  
高戸名の鴨と並り○神名式に高倍神あり是ハ高倉の義  
成べり嚴倉の意也○魚とよみり讚岐にて何れ能登りて  
こころとよみり

たのち 倭名抄に辛芥と訓せり莖の高き之新撰字鏡小  
菘とよみり

たうち 今の氏姓に小鳥遊とよみり無鷹の義あり俗に入  
の多く集りて物いひさわともいふ此義あり○高梨の姓  
ハ平家物語にあり

たのぶと 續日本紀に高鴨神とよみり土佐風土記に一言  
主神也とよみり神賀辞に阿遲須岐高孫根命の御魂乎葛  
木乃鴨能神奈備尔坐神名式に葛上郡高鴨阿知須岐託  
彦根命四座とよみり四座の内一言主もすはとよみり高  
鴨ハ高神とよみり詞にもあり然ん土左山中に尊き神とよみり

て高神とよみり山城賀茂山と神山と詠ぎ例とゆりぬ又高賀茂  
の姓ハ事代主命の孫とよみり賀茂系譜にとよみり兼源説に  
一言主神と事代主命也とよみり式葛上郡に鴨都美波八重  
事代主命神社葛木座一言主神社とよみり

たのち 倭名抄に菘とよみり竹苗の義也とよみり或ハ竹葉  
菜の義とよみり新撰字鏡にたのちハ拾遺集源氏にたのちとよみり  
とよみり○たのちハ偽菘とよみり○たのちとよみりハ仙  
人杖とよみり枯死竹筍也

たのち 焊菜とよみり又石龍苳もとよみり又田せり西國ふし  
とよみり又とよみり又ひきの上総とよみり  
たのち 何首鳥也とよみり黄獨の古名成べり

たのち 高屏也  
たのち 簞とよみり竹席の義桃竹とよみり編み席とよみり俗  
にとよみり又筍席あり又檜楯簞あり和名抄にハ簞上



聲之重此間名如字とん名

たうらう

蟹穀草也とらう秋冬の類之文入の品観く足

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

貝子とらふ相貝經らうて形をめて名派異らふ

古へ貝子とめて金銀の用とあるよて財寶賣買の字皆貝と後

つら琉球の古へ然つと南島志とんえ今と雲南へ交易の

用とあるよて本草にんえらう又咬啣吧榜葛刺の海島とら

貝とめて交易す名とらうとんえとらうとらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう

たうらう



ぐー一説く啄木の音斑たる魚の鳥の木と啄く似たりとて一名松皮と云く一説く高卑の轉語也組のさ高卑あふともてりたり今と道路のたぐくとたぐくたり

たぐくとり 倭名抄く巧婦とより訓よてよめる成へ即鶴鶴也これと兼名苑く好割葦皮食中虫と注とれハ今の葦原雀あぐー割葦ともスん續千載集物名にとる

たくまへび 福州府志く千人學也逞き義ケるべー叔堅硬ゆてカと極りて摩に用あはく

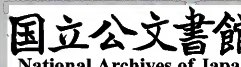
△たげ 伊勢一志郡の多氣也源親房卿の子頭能公國司たア〜より子孫相續のく十代ぐくと南伊勢五郡大和宇多郡紀伊熊野まてと制よりよて多氣御所と稱して國司の稱と相續せり所謂木造田丸大河内坂内岩内藤方大坂阿坂波瀬ハ下あく皆其族類也き南朝の初より室町數代の内ハ其後胤た〜と平信長公の跋扈せりより其胤亡ぬ今民間り僅小残

つと北畠と稱する者り其趾り櫻の馬場笠懸の馬場犬追物の馬場あり後人八幡宮と祀まろ〇姓くハ東鑑く多氣義幹

たけり 海鱧膾膾獸ふとの陰とより和名鈔く淫羊藿とまらたたりとて日本紀く感の字とまらりてとより此義ふふべー羊に羊石子くハ鹿く鹿腋とより〇鯨のたぐくとまるとも云たけりの宮ハ安藝の國也古事記りる

たけのこ 筍と云筍と同ト上總房洲たんことり琉球く竹箒葦四時有之とり夫木集り

孟宗竹ハ別種也〇たけとたりもハ世々信州のけりハ筍と知られる者ありて簀の子と煮るとり物語ハ笑林漢人有過呉呉人設筍問是何物曰竹也歸煮其床簀而不熟とる





たけのこ 日本後紀弘仁四年具竹實如麥と云る今をたけのこ

たけのこ 文選註竹葉酒也と云る今竹葉山紀伊郡稻

たけのこ 荷神社の東南にあり

たけのかえ 倭名抄篋と云る又籜とたのんふのうんうと

たけのこ 金銀と竹の内を流し鑄てきりう糸うして用ふる

たけのこ 一糸禪閣の藤川の記近江と美濃との山と左右

たけのこ 一見て行処也と云る

たけのこ 竹の虫粉也竹蛙肩と云る

たけのこ 竹茹と云る竹の甘皮の義也

たけのこ 本草に鬼齒と云る

たけのこ 仙人杖と云る本草に云る

たけのこ

たけのこ

たけのこ

たけのこ

たこ

章魚と云る手多きおあれハ手海胤の云々一交股の

中ノ鳶鴉と云る物ありと云る

緒ハ章魚切音諸と云る

一亦作蛞蝓と云る日本紀新撰字鏡ノ緒と云る和名抄小海

蛞蝓子と訓どり是今ノ足長たこと云る又貝たこ飯たこ穴たこ

蜘蛛たこ等の名あり飯たこハ塗蟻也蜘蛛たこハ東醫寶鑑ノ絡蹄

と云るたり式ノ乾鮑鮑腊あり類聚雜要ノ焼蛸あり○大た

この人及牛馬と云る蛛と戦ふと勝ち或ハ蛇海ノ尾と云る

鮑ノ化セリ物語諸國ノ多ク備後ノ蟾蜍の化セリ

又きこあり尾ノ岐ありと云る○倭名抄ノ馬脊瘡と訓どり

鮑のノヤノ似たりと云る今ハ人おもハ併肌也と云る

たこ

和名抄ノ鱧と云る今ノさごり

たこ 貝鮑の殻也章魚船の義手と掉あり海上と漕

ありと云るノ旁姫貝とも云る色黄白ありて形殊海棠の義

ありと云る



似て又葵の葉も似たりよと葵貝ともたり閩中海錯の鴛鴦螺也とたり

たこまらう

海燕とよ章魚枕の義へ人手或ハ塩手或ハ蜘蛛手と

とたり種類甚多し近世好事の介品と集りに桔梗貝あけり

花がくもふくもふたるハ其形圓うて圓座人手とり物のされ

たぶ文形にて名は分て海盤車品也

たりのく

人々欺詐とる事とよ俗語也

たのみけ

古事記にる名嗜菌此也とたり食之きは

菌とる

たうむ

牛面草一名苦蕎麥也又とるをともあるとよ

ともたり此草とも蝦蟇と釣の兒戯あり江戸ふひとる

よ

たうべ

多田部城ハ攝劔矢田部郡多し部山とたり楠

正儀々赤松光範と攻一所也○攝津河辺郡多田院村と五

社祠あり相傳ふ満仲頼光頼信頼義義家と祭ふとる

たけ

埃囊抄に狸とよ童蒙頌韻に狸と訓たり帝範

に捕鼠狸不可使之搏獸とるハ所謂猫狸也此とよとる

けの草ふともんたり唐書に狸毛筆とる

たぐす

古事記に朝日之直刺國夕日之日照國也とる

祝詞に朝日の日向處夕日、日隱處とある同く偏く日光と

受るはとる

たふえ

古事記にソノ山の山にけり射とるけり

や万葉集に楯並てソノのうもえゆり川ハけり挑川の

日本紀にるえたり

たが

苛辣あふとる蓼辛の義に

たらしのり

政事要略衛門府風俗歌にるえたり恒例

會式に稻荷出居三月たらしの生花烏帽子に付あり同街祭

四月卯花也とるえとるすけけり春ハ中々ありたり



とくひもてたらしむる色ともほふれどもさへあり埃囊抄小薤と  
たらしむる訓に幸た物ととらる新撰字鏡に草部より延  
喜式にも多く良比賣花搗三斗と云ふなり或ハ石龍肉と  
今下総とたらしむるとり又早蓮草と訓む其證を云ふ○源氏  
とたし梅の花の色のごとくけりかひさきと云ふなり  
る

立處の義也

△たらしむる  
たらしむる 土佐日記に云くたらしむるは浪起障の義也  
たらしむる 武州也真言立川の一流ハ仁寛陰陽師と議して  
此邪流を始む仁寛ハ君と弑せんとせしむる者也  
たらしむる 今の氏姓に日日と云ふなり朔日晦日の訓を取らる  
たらしむる 裁着の義や奴袴の類也  
たらしむる 太刀魚の義刀魚也とらる埃囊抄に勤と云ふなり  
たらしむる 本州に人の此魚伏見に多し唐山の俗帶魚とも云ふ筑前を

たらしむる

たらしむる 大饗の時鯉ときほまふとらる断作の義也○た  
ちつとらる 何と云ふハ太刀造の義あり

たらしむる

たらしむる 大神宮の忌辭に佛と云ふなり砂石集ふるなり  
たらしむる 紋形とらるあつひのまゝなる形也○一種の草ふ名  
く葉の形あつひの如く一茎に三葉づくめて糸の上へ花咲り色白  
くし小草也

たらしむる

たらしむる 文選に駢肩と云ふ文集にハ比目と云ふ  
たらしむる 樹木にハ蜻蛉日記に云ふなり字書に立死日

稲とらる

たちむれやき 橘焼の義かまほこの如くびんありよまあり  
みせはよく煮てけりるもの枝にけりて出たなり大諸禮に  
えり

たらしむる

和名抄に牛扁を訓むる本草に云ふなり能







弘仁五年の詔みと春耕候花不憇濯枝之潤と云々あり○土佐ノ海藻の類ヲたつとつと呼者何れ穗たつとつに似たり

答拜の義也

辰の市とつけり大和添上郡にあり

たつとつまき 関東の俗語也龍水卷の義大雨の時龍の水とほ

あつとつ是也

たつのひげ 新撰字鏡石龍葛とあり

たつのひま 龍馬の文字よ

たつとつらり 俗語氣象の鋭敏をさうとつと龍蛇の騰るに比

さうとつや○草ふりふる薇荷也とあり

△たて 蓼とつら爛まの多辛辣をめて口舌の爛まう如き

つたを反で也音つらう也つらの時ハ草長大良倭名抄に青蓼

と云々やあつとつ是之又寒とつハ香蓼唐もてハ紫蓼藍たてこ

呼ハ葉圓一録倉たてハ水蓼犬とてハ馬蓼けとてハ毛蓼又大毛

蓼と称するハ水葦之倭名抄に葦草のたてと云々あり

りそとつとつハ穂蓼の義之利根草の名下字集に云々あり

四季の蓼ハ相州高座郡蓼川村にあり○たてかつたハ葦蒨草

也とつら加茂少く櫻とつとつ○たてくつ虫とつハ諺ハ魏都

賦に習蓼虫之忘辛と云々あり

たてふ 俗語に湯めて瘡を治たつとつとつハ人叱するたて

考るにくつとつら蓼より出たる詞をさう○船底をけりて

船の軽うんと好むとつら

たてぐ 立所の義也とつら

たてぐ 倭名抄に髦をたちかきとつとつ馬ふらり新撰字

鏡文選に鬣とつら立髪之義也○今昔物語に馬の法師髪と

たてぐ 越中因新川郡にあり麓より巔に三十三里餘と

つ建石勝神社祭神伊弉諾尊也とつらカ雄社にあり手カ雄



命也万葉集うちら山とよらり今ま山とけり  
たてこめか 指籠ふ義敵を防くよりソラノ堰城とよ意也

△たどり 倭名抄ノ鶏と訓より田鳥の義と新撰字鏡よりは

鵠とよらり

たどん 炭團とけり炭餅とよ也たどんともんりらふ

みのり松かさ焼くむしとソラノ体源抄にケケ木菽の木

よいとちやくよりソラノアケラ

△たふご 鱒魚とよらり田兒の義と関東オキ若鮎とよ筑紫

ハソテ志スル物とよ鮎化鱒鱒化鮎鮎を李時珍もスル

本紙書より鮎鮎ハソラノ〇海魚に名く鱒魚也と

ソ一説ノ河ノ生じて海ノ長ズとソラノ鱒鮎と同トク胞中兒

と曩し者こととソラハ柵子の糸や蝦夷とソラノ〇東鑑ハ

種子とよらりソラノ

たふらせ 鰕の類の名たふさの時分より出ふとの故とよ

あふへー是手長蝦と称する者よりて又裸蝦とよ

たふひをり 文選ノ怵字とよらり

たふびづつき 七夕月の義七月とよ

△たふや 大泥亞とけり歐羅巴の内に波羅丘亞の内に

あり天文曆象の測器ハ此國を最一とすとよ

たふー 田螺とよ田幸螺の義也又たつがとよ和名抄より

田中螺とスんたつと訓せり又甲贏子とけり訓せり料理

ヲ吸盡とよ事ハソラノ土佐ノ一名田貝〇田螺ロと開きと小蛇

来て是とよ田螺蓋を閉て泥中ノ小蛇躍り揚まといん

とよ息絶て死ぬ明和年中於らり

たふせり 前胡とよ又のふけとよ〇柴胡ハ大葉小葉の二

種あり

たふりらり 花肆ノ連翹と称より〇草にソラノ歪頭菜とよ

ソ短小なるとたふりらりソラノ葉うらに紋あり伊吹谷とよ



フ種類よりけり蔓草に似て萩に似たる花也

△たぬきまら

本草にも狸豆と云ふる若水と云ふ八并まらとす今隠元まら此一名とせり

△たのこ

田面の義也

たのこ

續日本紀よりたのこは神代紀に無頼とたの

こはけふと云ふる又頼之基俊の説に鹿狩り人のた

のり狩狩と云ふるに合せてたのこ其日よりたの鹿と云ふ

人よりたのこと云ふる今も義金と云ふる人の貧困と云

すろ名目と云ふる唐山の俗語に結會と云ふるを聞分

子と云ふる左傳の註に會ハ祭也と云ふて茶の會趣の會と茶

社圓社と云ふるも意同也○つづか物語に頼と云ふるはたの

ふはたの反のほとこのりといふるの義也といふる○頼と云ふるの

詞を上総よりいふるといふる艦擢ハ船の具なり

たのこ

倭名抄に手巾と云ふる手拭の義之類聚雜要より手

巾茗又也今ハなぬきまらと云ふ○僧家より音よりてなぬきまら組と云ふ物

より帯と云ふ○花もなぬきまら阿蘭陀より來る緋紅巾也

△たご

蠻語也亞墨利加のいりすの一島より始て出と

といふ一説にいりすより始て出ともいふる芝峰類説に始出

倭國といふる據ハ西土ハ我邦より傳へたる一西土ハ烟草烟花

相思草及魂烟と云ふる李白詩相思如烟草歷乱無冬春と

相思草の名出於此又淡婆姑淡芭菘淡把姑檣不歸と書せ

る今南京ハ烟といふ或ハ蕙字とせり漳州福州ハ茶と云

ふる南草と稱せり天正文祿の比より始て我邦より日用の物と

云ふる長崎櫻馬場殖初て後山州花山より出ると是と花山たご

と云ふる又より野といふる近き御世の御製と云ふ

ふる吉野の郡名也小兒の詞より云ふ○たご入ハ烟袋之

たご

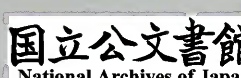


提鏡印の類と薩州の農夫ののんちと云々淡婆姑庵丁ハ烟灶刀也たぐとぼんハ烟盤也又芬盤と云々火入を火盆と云々又火盆と云盤中のたぐと入と烟盆と云々吸ぐハ餘燼と云々〇俗リヤふたぐこと称するものハ天名精也水たぐと云々薄青也又山草ふ岩たぐと云々

たぐもろり 俗語也无根のろり无對配之謂也

△たぐ 日本紀倭名抄云鯛と云々祭文の詞云鯛の平らり鱒の弥益云々紀云鯛女も赤鯛も云々鯛字膳夫録にも出たり海鯽魚と云々延喜式云平魚と云々女名詞云々ろり云々豊前云々へけと云々東武云々弁慶鯛と云々肥前唐津云々へけと云々土左云々たぐと云々皆平魚の粘之今南京人紅魚と云々漳州人ハ鮫鱈と云々方言云々朝鮮云々道味魚まろ掉尾魚と云々たぐと云々文字と填も也今と云々

ハの轉語也明の書ハ紅鬚魚棘鬚魚と云々寶藏鯛久鯛目白鯛具足鯛市女鯛尾鯛鼻折鯛小龍鯛らぬ鯛と云々鯛絲より鯛白皮甘鯛鷹の羽鯛錦鯛と云々鯛石鯛猪鯛炭焼鯛鬼鯛蓮鯛万年鯛と云々鯛覆面鯛黒鯛沖津鯛笛吹鯛と云々鯛ちと鯛等の種あり麥藁鯛ハ四月に出ふと中國四國と云々尾鯛出雲と云々関東と云々沖津鯛也駿州沖津と賞す〇南産志の方頭ハ尾鯛黄鯛ハ鼻折鯛鳥類ハ黒鯛海鯽ハらぬ鯛也と云々〇鯛の波潛鯉の瀧登と云々〇和名抄ハたぐと云々伊勢駿河相模と云々東武と再と云々たぐと云々蟻雄と訓と云々玉珧也と云々平箭の義と云々蛭と云々大坂と云々貝と云々志摩と云々扇貝と云々魚の名薄墨色也鯛樽の義と云々





たひんこ 七種の菜にりふ田平子の義萬螺菜也とりて芥蕘  
に似て莖紫也又大たひんこあり鬼たひんこもりふ○川魚云  
はてえの種鱗鮎也湖水にそらてとりて赤白黒あり又分て  
らくろさびるもの品ありとぞ

たひんぐり 竹取物語大和物語ありとぞ

たひんご 答話の音也とぞ

たひんご 俗に黙とぞ黙止とぞとまふの轉るべし  
たひんご 俗語也騙字謾字の意あり互むるれど迂と同義  
たひんご 俗にあや世事使用しん唆哄とぞけり○だはとぞとぞ

たひんご 眩惑の意たひんごとまふの義也  
たひんご 玉虫の義吉丁虫也とりて四季物語に此虫ハヤン  
とぞけり

たひんご 中白ふんち中にもりびとぞけり本草に人取帯之令人喜好  
相愛媚薬也とりてとぞけり

生と新撰六帖よりとぞけり通雅に緑金蟬とぞとて即吉丁虫也  
とぞけり○源平天嶋の戦に皆紅の扇に日出しとぞけり持出とぞ  
女房の名少とぞけり○安永し未の夏五月の末に本居の傍小友  
古塚と建て日本書紀通證倭訓栞句玉考の草稿と埋りぬ其  
碑と彫と建一處に玉虫三日つきて入来とぞけり是亦一奇とぞ  
謂一數百歳の後とぞとぞ色損とぞ形不壞とぞ也  
たひんご 玉造とぞけり奥州の地名也  
たひんご 玉椿也玉ハほえてとぞけり或はり玉白玉也とぞけり  
是西國の称也○一種の樹とぞけり葉枸杞の如とぞけりて大  
花ハ檀の如し杜仲也とぞけり又香椿とぞけり椿とぞけり  
とぞけり  
たひんご 玉櫛篋也曉とぞけりハ垢着の義とぞけり  
とぞけり開とぞけり開とぞけり開とぞけり開とぞけり  
けり之垂水の如とぞけり



たるとくす 葛の葉をたの巻をたの玉の如くくす也ワの葉

たるとくす 薤也とくすらんけうとくす〇小木の葉の色紫

たるとくす 築紫とくす小紫とくす紫志きとくす式部の將

たるとくす 訛とくす

たるとくす 玉簪の義〇花草にきぎぼりの類

たるとくす 遺文三十軸軸金玉聲と白氏文集にん

たるとくす 孫綽天台山賦の事り出る

たるとくす 癰とくす田虫の義其病状田虫の入を如〇かん

たるとくす 癰とくす陰器癰也〇狗の舐る水とて手面を洗を癰とくす

たるとくす 病源候論りる〇俗にたのの咒禁にえの木に

たるとくす つとて立處し愈とくす古今注りえの本に注して木似豫樟

たるとくす 皮多癰駁とくす

たるとくす 俗に郊外とくす田畠の將る

たんと 俗語也多記意とくす蒙求の姜維膽斗の字也遠

たんと 参りてことしの豊後とくすことりちえ反也武藏とくす

たんと 短帖とくすけりたとのみだり也

たんと 談合とくすけりたとのみだり也

たんと 段菊の義とくす段小花けりきれと菊品り

たんと 花と紫白あり乱菊とくす

たんと 蒲公英とくすたのほの葉やたの本名ありハ實乃

たんと ぼけとくす名白敷丁ともよまててふと艸と呼と又

たんと 藤菜とも称す黄白二種あふなりとくすたんぼくとくす出羽

たんと 樹皮とくす交趾より来る深家の用とくす是た

たんと の木也とくす〇蕓菜とくす田づりの轉

たんと 大将とくす團所とくす軍團より謬とくす〇御師檀所

たんと











たろと 多羅尾とのけり伊賀の地名也

たろけふ 墮落の轉也詞ありける反く也たろつと

たろくともろり ○たろとも同義や著聞集より何たり

たろけりとも意通せり ○越中に思ふかたろけり

△たろいり 樽石の義大に餘糧せり酒器より唐元結

集り道州東左湖有小石山山顛有宗石可以作樽名瓦樽石

とろえ白樂天と亦樽石あり

△たろゑる 對配の字なり

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)*

倭訓栞後編卷之十一終



